里見八犬傳

第七輯

巻之叁

~13
709
35

遠へ明
709
巻35

明治三六年十月九日購求

南總里見八犬傳第七輯巻之三

東都　曲亭主人編次

第六十六回

妖邪を斬て禮儀父の怨を雪む　毒婦を弓て縁連白井に還る

再説犬村角太郎禮儀は信友犬飼現八が長物語を初て安房に父の真偽を鮮血の明證疑べくもあらざれば像見の髑髏短刀を受戴々々て視る目ふ流る千行の涙を空に飲めども後悔慚愧の方もなく歎息の外なきを此の人〻貌を改め現八に對ひて賢なる犬飼ねー御邉の忠告なかりせば某悟ることを由なくて真の父の横死をうらむ仇をなく親と一事へて又只非人妖怪に苦めらるるのみならずその毒悪の術にて死る狀を今贈られ父の白骨像見の短刀をこれを彼を思へども和漢今昔例稀なる一大奇異と

蒲泉堂藏

いふべきの三父の横死い某ゞ四五歳の比ろ一ゞ実ふとの短刀もけふえでめそれる心地
ちく一毫ゞも認ら孫ど僅ま送る家の紋魚葉牡丹い紫銅の鞘ようそ分
明へいろん知亦某ゞ肱の鮮血を髑髏ゆ受ゞ早ふ疑ひを解れる緯の進退
武藝の精妙ゆ白刃の下にちく一言ふよく義を盡されその緯の用心を今
ちらふ出ひ合まれいきのふ武藝を討論せられ言次ゆ何とちく親子久く離別
ちく真偽ふ疑ひあるゆ或いその血を合ゝ試ゞ或い親の白骨ゆ子の血を灑
ぎく知るとふ俗説をひ出ゞ和漢の出処を問ゞふ某いはる心もつゞ梁書
新唐書を引出て云云と答めれる後ゆ疑念を釋ゞる方便と知られ意
味深ゆ然ゞもこの年来身い深山の土と化ゝる寃を伸ふ由なゞけん
亡父の怨を復せゝゆ皆是御邉の賜ゆゆく且雛衣ゞ命を三毒ふ不用
意の資ふれゞ併灵玉の奇特い神速至妙の天刑一箇闕ても通力不

測の雙言を敷ゞ難ゆゞ神と人との助けまられ只ゞ不肖を顧れひと恥く
ゝと悲ゝふいれども不憶世の豪傑ふ係る大士の隙ふちも入ゆ敢ひあり安房の
里見ふ由ゆゞ亡父の御邉ふ示ゝる詞句い奇ふく誠ふ當ゞ死ゞ霊ある
ゆを思へ然ゞも在世の志操想像られて痛ゞ悔の八千遍百千遍ゆ口説
とも甲悲ゞ及ぶ往事ふ逐ふべゞ憂苦ふ堪ぬ諄言い女々ゝゆのと思い
まん許ゝゆとうち賠話く家庫の紙戸を押ひ髑髏を歛め頼ゞ拜ゞ霊妥
時祈念を凝ゝる廻向ゞて退けい現人ゆ撲仆される假一角ふ我ん必ゞく犬
村主々々霊玉の威徳ふよゞ虎彪ゆもまを妖猫の鴆尾骨砕けて仆ゞ
ひも怨の十々滅をきく刺ゞい甦生まるゞとのゆあん今ゆ猶豫ゞ思ゞひる角
太郎嗟歎ゝて某とそもそのゆを思ゞるゆあらねどゆ舊體を露ふゞ親ふ似く
らん仆るゆを頸搦捕られい快らゞ大凡老る妖怪の死ゝて本體を露ふゞとも

廿四時捨置ハ崔呂體よりとりくゝ姑く時を俟んと彼ハ就死此ハ就死も迷惑
せし雛衣ゝ乳の下を出ひの隨ハ少紀斬て伏くれば又華陀蒼公在とても救ふべからハ
あらねども狗彘ならぬ渠ゞ大功縛の趣如此々々と報知せる後の世の迷ひのあるよ
霧月ぬべし。然いわらもやとひろひて妻の身退へ立よれば現八も亦感涙の眼包を共ス
数瞬ゝく寔ハ御邉ハ孝子ゝ妖怪ハ且捨措て雛衣とあを呼活んさいとく
躰ゝく容あゝゞ傷人の右より左よりをさゝ入れく引起せば鮮血漆れ雛衣
大腸小腸溢れ出ゝく目も當ゝ紀光景ゝ両人声を隱らゝとやゝ雛衣ゝ
との心を慥ゝ知ゝ人ゝ刃ゞ自殺の功德ゝよりて量表ハ謬ゝく天ゝ王ゝ灵王瘡口
ゝ顯れゝく親の寃家ゝ敷ゝ仆ゝ膜の瞳張ゝも亦彼王の所以ゝく
懷胎ゝ知ゝ紀やゝ南々と呼活ゝ声届紀ゝ雛衣ハ吻ゝく息も目も細ゝ
ゝ左右をゝ入ゝて南ゝ所夫ゝ犬飼ゝ欲衢ゝ紀彼ハ者ゝの長物ゝ

ゝを現ゝも夢ゝもゝで髑髏の奇特ハ男公の雙言を初めそゝれ
ゝ。不思議ゝゝんもゝまゝ。大約人の命根の長さ短紀等ゝ紀も禀ゝる定
數ゝゝ生けば十九の厄ゞ一期ハ非命ハ終る幸ゝも何憾紀良人の為ハ
功ゝゝゝる妻ゝ面目ゝ歡ゝゝゝ細ゝ声絶ゝ絶ゝ動く
脣の色ゝ変ゝ知死期時左右ハ薦ゝ唱名の声をゝゝハ雛衣ハ持ゝ刃を投
捨ゝく南膜ゝゝ合掌ゝ心神ゝ紀烈ハ女の終ゝ忽地礙ゝ俯
せゝ伏息ハ絶ハけゝ豫ゝく期ゝゝゝ人木石ハゝゝ角太郎ゝ愀
然ゝ且ゝ立ゝ難ゝゝを現八慰ハ且奬ゝ雛衣ゞ亡骸ゝ
程ハ牙二郎忽地息出ゝ。身を起ゝ銑鋭を掻抓ゝ抜取ゝく前面ハ
立ゝゝ現八ゞ胸前望ゞ投ゝを現八透ゝ中刀の柄ゝく丁ゝ受留ゝ
登時牙二郎ゝく怒ゝく倭僧ゞゝ刀ゝゝ振ゝ敵ゝゝ擇ゝ敷ゝ

進むを角太郎推隔く人面獣子の悪少年。汝御高ぶ罵くられを人面獣心なりと。いと迦ぶくるるぞ汝が実母いこぶ継母でも父が四足の人非人亂を人倫を潰したる天の罰罰いぐろ免さん刃を受けと罵く。

扳合ったる煉の刀尖一上一下と殺結べば牙二郎が初度の巨瘡ふ大刀筋取次の乱打遂に刃を打蜚されく又中刀を扳人とせを扳ーも果ぜ角太郎が閃かくる刀の冴み細頸丁と斃る落葉叫びもあへぬ牙二郎が軀が後ざまに踏地ろぐく間近く俯る假一角ふ。ち累ねてぞ仆きける。物の御音と恩愛のそれ乳や自然ふ通ーけん死ぜーとええる假一角が忽地嘆く声震動ーく障子紙戸も裂るが如く雙ぶを張く身を起せば。ぐ。ぶる奇怪の相貌既ま年老る山猫の形體を露を面部の斑毛眼の光が百煉の鏡を並掛る如く。髪然ーて長く鎧髯が宛雪を串く枯野の芒ふ異るぞ耳まぐ裂く

凄ーく口が血を吐る盆ま似く牙を鳴らーー爪を張る四下を疾視で吻く息。挾霧と立りく朦朧る庵の中が雲ま入る月下の宿欲と疑る角太郎を妖怪の本體をえく此も騒ぐを持る血刀拭ま隙ぐく敵の左を間近くぶを。姑く透を窺ぶ後方ま引添ふ現八も倶る刃を扳敬ぬく呼吸を揃る初大刀の進退倘ぶま餘ぶ資んとく考ーく心を配りけるこの時ぶも虚減る。舩虫が驚怕れて其処ま俯たくるま勝れば。一膝扳ぶを跋退ぶを外面投く逃歩を角太郎も現八も大敵既ま前ふあれば後をんる暇ぶく勝負をあま決せんとる間近つを眺つく頻りま嗜る妖怪が人語自由の声高ぶふ朽ぶーや。この年来ぶれ人間ふ交参く妻ま狎れ子を産せ暇の人ま敬れて快楽ま光陰を送りーま角太郎が秘藏の玉が雛衣が呑ーとりぶが腹中ま在るをいぶ。ぶ胎を求ゆく自殺を薦めーぶとの一支まりぶく敗れて深疾を肩ぶ傷のこ

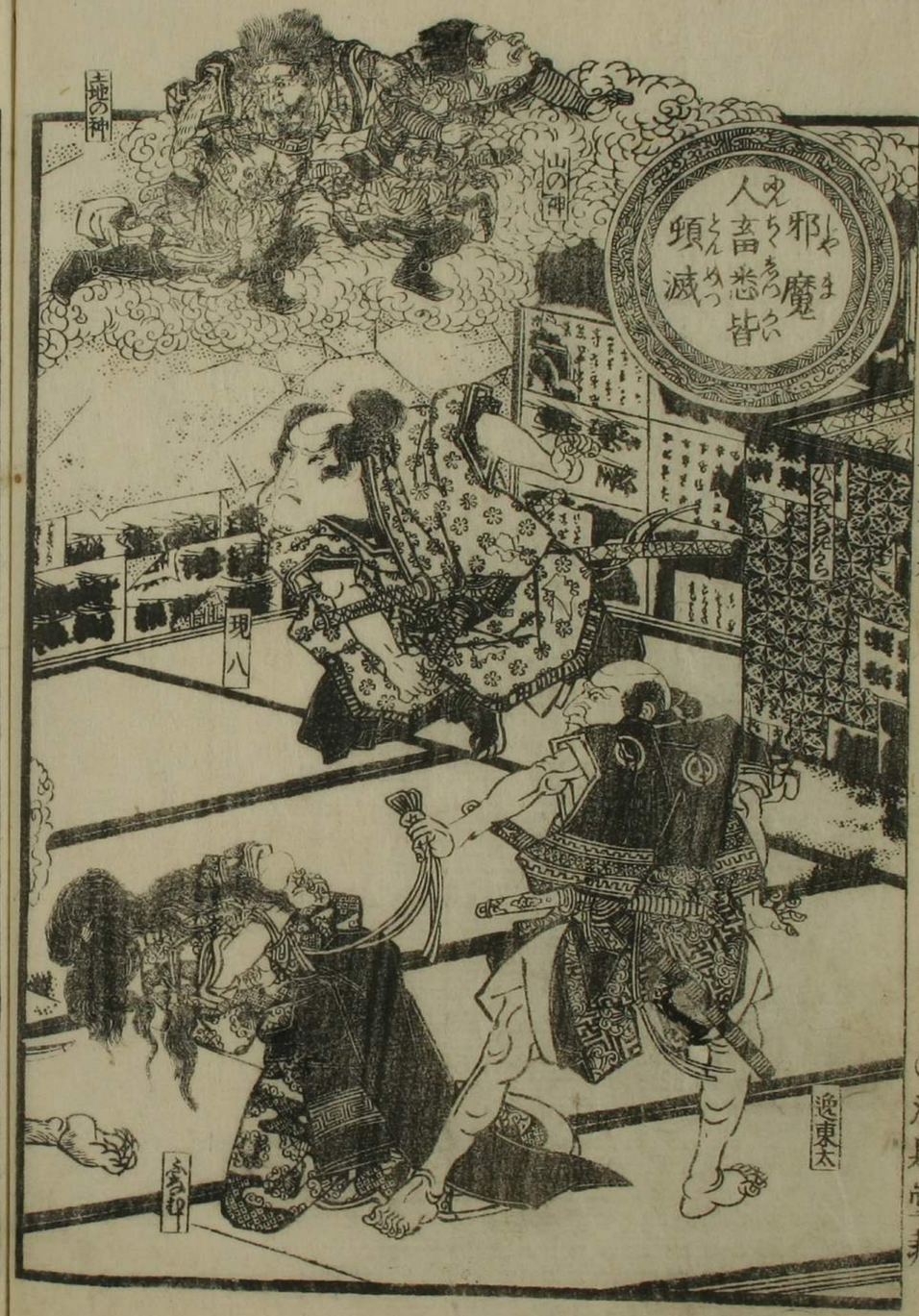
なりき牙二郎さへに命を隕せし累なる怨ハ礼度信道犬士と唱る名詮自
性犬ハ又ふ身の仇なりけりかゝれバ一昨小夜深し庚申山のほとりにてこれを遠箭に
被かうしも現八汝が所為なるべし二人なから引裂きて血を吸ひ肉を啖んと思ひしが通
力もその甲斐なし覚期をせよと罵るを二犬士呵々とうち笑ひて言甲斐なしや畜生が
此の魔術に長くとも竟に漏さぬ天の網父の讐妻の仇名異両なから讀さ
まてるけふ復讐の天運循環句 庚申山の樹の上にかくれ在としもしらずまゝ了本
事ハその身に覚あるべし退る進めと双方齊一寄ましを寄せし上に山猫も飛
鳥のごとく蜚遶るを現八戸口に立塞りて初太刀を譲る二勇士の進退頻りに勇
む角太郎ハ是首に追詰彼首に攻つけ數個閃かす刀に怯まぬ妖怪もなく
嗥り狂ひて窓の竹隔子に爪うち懸け脱れ去らんとする処を丁と撃たる角太
郎が手煉の刀尖衍ふまで使しも猛き山猫ハ腰の骨を砍放されて臀居に撞

と轉輾ぶを得さすと刀を拿直し登し蒐く吭のあたりを鍔も徹れとつらぬくほど
なく刺貫れて山猫ハ四足を悶くに息絶にける既にして角太郎ハ父の像見の短刀を
懐より拿出して十々滅を刺せバ奇なるかな彼礼の字ある靈玉ハ瘡口より顕れ出
しを角太郎ハ手早く見て血を押拭ひうち戴なく現八に云云と告てその玉をみせけれバ
現八も亦欣び感じて凡てふ犬士の黨皆秘藏せる靈玉の奇特あるよしを語る
ろし既に玉の冥助によりて妖怪親子ハ討ましかども其妻なりし船虫ハ虚死して
なく逃亡たり聊時の移りしかも何地まで走るべき先追蒐て引捕まへんと
ひらりて裳を高く引折て外面望て出んとすれバ縁頬に人ありて大飼ぬし侯の
要時々々と呼留めて母屋に進入るもの有是則別人ならず荒芽山逸東太縁
連にて當下逸東太ハ大刀の緒をもて縛る船虫を牽立来てその身も亦大小の
腰刀を除却けて二犬士の身邊によらで措た障子の裏下に退なて恭しく額を

は死犬飼犬村の両豪傑を勸解るも面目所存なく凡眼玉石を辨ずして
妖怪の為惑されて犬飼ゆゑに賊と誣く推捕籠で繫んとするに某一人の
のくせものあらねど今はらいひ解く出もあらざ然るを亦牙二郎みそのうさまこく追
蒐来つ犬村ゆゑ罵りくる過言ハ駟も及ばず介るを儻ゆ假一角夫婦がいく
来ると死某を説諭してこく赤岩へ退けといれるのまろうくて後者をのみ且
いまく某ハ又執て返ハこの庭面の袖墻の蔭を躲れく竊ゆりくれば雛衣の
自殺の一條妖怪親子の綜の顛末且仇讐の為体を駭き羞く今はつふ
ゆるゆも生くこれば便宜を窺ひよこの船虫が脱れ出くと走るを矢庭に引捕
へくかの如くを絆ゆ某主君よりの預を携来る短刀ハ假一角が幻術りく竊
畧を鞘を摧くく未と服ハ趣さえを竊ゆりてこめく怯きの幸ひ〻く彼
短刀ハ今黄中ゆあるとこへも鞘失たれば介ゆ同じ両君子ハ悍ーとこへも心ざる

慈善ゆく好て人を殺ゆるを有如之者犯せ科を免しその短刀をゆとの某自
井へ立ゆて主君へ〻く辭ゆりるの船虫も假一角が悪を資け耦賊へ短刀と
共伜ゆ某を賜らが白井の城へ奉ゆく帰てまこーこの種ゆまつべ某ゆ足
らざーく両君子ゆ強面當ーー先非ゆ脛を嗤ゆるその罪萬死ゆ當れども
幸ひゆく免されるゆ再生の大恩を賢慮を仰ぎゆと唧ゆまく死口説く
額を席薦ゆ擊埋めく哀を告る佞辯邪計を憎ーと雖ども二天士ハ冷笑ゆ
の墨譴めざ且ーて現ハ角太郎みち對ひく縁連事の敗れを及びく船
虫を搦捕ゆ猶且辭を巧みて竊ゆ利を揣らんと欺くこの説を何と雖ゆと問ハ
角太郎頷ゆく逸東太ハ御邉の仇又船虫ゆ妻の怨敵へ免さゆの
ゆ孫ゆ渠既ゆ両刀を投ーこーく命をもへり斬らば刀を瀆さんのみ又船虫ハ
ちゆ比妖怪ゆ相狎くゆ後妻ゆ〻れども父の讎ゆ但雛衣ゆ

角太郎
貂てん
鯖まて
牙二郎


地の神
山の神
邪魔
畜生
人
悉皆
滅
現八
逸東太

つれる
強顔やうしいその牡妖ふ媚るの所以へかれば白井へ遣しその刑罰を人ふ任せ
假ふも継母とられくるうぶ恥辱ふ遠離らんこの誠いらぐと問ふ女ぶ現八も亦頷
くふ然らば船虫ふ問ふとあり汝い假一角を妖怪と知る狡大ふ知らるる
ぶ一ふるさきの雛衣とく入水せんとせられし時媒人氷六と共倶ふ禁めく
その死を救ひるのそれ本意ふ反いらこ軈て十字竹輿ふ乗しとの草
庵へ伴ひ来つ巧言利口ふ任せく遂ふ夫婦を一処ふせ胎内の子を奪ん
為欲ふ船虫ともその折ふ彼木天蓼を偽りく抑汝いふ知らく矢傷の
藥法ふ用ふるを知らるぞ安ふ血の問ふ似れども後の疑ひを釋ん為ふ明々
地ふ首伏せよいふぞと責問ふ船虫愚むを強ぶ跪ふ陳ずるやうあん
疑ひ理りと妄ふ素より連副ふ夫を妖怪とふ夢ふも知らざきふ朝一角が
不慮ふ眼を傷ーとりを妄ふ告ぐ又いふるうどの眼の矢傷ふ苦年土

中ふ埋れる木天蓼の真木と胎内の子と母の血とふこの三種を用ひ目子舊のと
くふ愈く物をうるを明るん或い木天蓼を獲て胎を獲ず或い胎内子のみを
獲て木天蓼を獲ずとふも何ふまれ一種ふも用るとれいその效あり但物をうる
のこ雛衣い有身て四五个月ふるりふとふ究竟の藥剤へ惜らくい離別せられく
今いその子を求るふ由ふ便宜をうるい左ふも右ふも謀りあんとられ
日出のうさふ圖ずも彼婦人の身を枝川ふ投げとせ林ふく便をうるを軈て
夫婦を一処ふあらく勘當をさ許さて親の威光ふ胎内の子を水と計較ふ
らく程もなく木天蓼の良材も亦ふよ入けれいらく一角と謀合と綽云云と謀り
ふ今ゆら後悔その詮なけまで世ふ女子と生れ一ふ好ふ夫ふも夫の為ふ心我用
ひるのるければ夫の指揮ふ已をうるぞ猜ーふとのふ現八冷笑ひく
夫の為ふ謀ることも悪事と知らず諫ふ残忍邪慳を事とせ夫ふ忠心

ある貞女とのたんや寔よ島嶽の癖者と叱徴せば船虫が頭を低て俯こびるのみぞ登時現八を又逸東太よりも對ひて縁連和主が辨舌のく言を餝りそなりを乞やとも允さぬ〜いわねど武士たるものく恥をあらそ阿容々々として命惜むが志ある百姓ゆも町人ゆも劣さるゆける白物を敵るふ〜と官府と旁〜なるらむを不狂人ゆ走るよ似るる犬村ぬ〜よ意趣るければ亦れも亦怨をあらぬ乞る隨て木犬蓼丸ゆ船虫を取られべ〜さられ赤岩犬村る村長里人ゆよ報知さぞこの侭允さば證人る〜後の異論の為るれば件の人々を招ぎよまべ〜赤岩より隨ひ来る妖怪親子の後者ゆを為ぬ外面よりあるん彼主を使よ遣まべ〜と呼てよりもぞ逸東太ハとの幾條よ初く生る心地して遽く合るゆう否赤岩の從者ゆハ鄙よ妖怪の暴嗜りる声ゆ怕れて逃亡るとゆよ現八沈吟〜く介らば縁連和主を労せん件の村よ赴く村長ゆをあらぬ〜ゆ〜ゆよ〜く〜せぞゆと分付る權と

執られ逸東太ハ是まで推辞とをゆぞ兼るゆと応て船虫を絆る索の端を柱よ繋ぎく走去らんとまる程よ外面よ人々〜やよ等ゆと呼林ゆ障子の蔭ゆ立別れる左右弁一進入るをられば見別るゆぞ月蓑團五ハ憲東太ゆければ角太郎現八を綽のまゆを揃て些も油断せざりけり當下團吾東太ゆハ推乃来る異類の頭顱を席上る推並べ天士よりも對ひく年来名城藉り形を似せる妖怪殺るゆく畜生覚れく仇を報れ綽の趣ハ量裏ゆ假一角親子の後者の逃く赤岩へ〜く走るゆ云と報るよりその教びを述ん為よ両箇の首級を齎〜たり見ハれ彼山猫の眷属る最も年老る貓と貓と山猫よ相從ふく孰生の形貌よ変〜貓ハ王阪飛伴太と呼れ貓ハ佐足濃太郎と呼れく人間ゆ在ること久〜然るを昨宵犬飼ゆの大刀風ゆ殺立られく見奴ゆ既よ深疵を負ぬされ負死ざれば逃く深山隠れとくけるを某ゆ相謀て刺殺〜て首級を

捕ふ方今の何ぞ悪むべき俺們も亦人倫なるぞ庚申山の麓なる土地の神と山神と神通山猫とに及びたまふ件の山猫に仮使れて亦塾生に変じ園吾東太と呼ばれし真実帰降なるあり昨の宵山猫が胎内宮の遺骨を男士の猟箭に射て落されしを幸ひとして肩に引被け扶けて赤岩に還りぬ又只俺們のごとき件の山の木精なり役使れ馬に変じたる年来赤岩なる宿所の厩に繋がれつゝ山猫の繋がれしより落ちぶれて犬飼犬村両豪傑の資よりて怨敵亡び俺們ぬしび昔所に安堵を歓び壁を取るに物なしとて赤岩犬村なる村長里人に徇知らず及赤岩の第子に縁由を告げ弟子に皆駭くのみ妖怪を師と仰ぎその大刀筋を稟ずるを羨むに来べくもあらねど村長里人に会まべしとのよし式告んとて且く立よる去来々々と別を告てそ外面出ずと思へば忽地二象の

雲と変じて庚申山のなる飛去けり逸東太舩虫のごとく奇異性事に足れるを仰ぐのみ角太郎と現八を件の悪獣両箇の首級を引ぎ来りて つらくなるに貂も尋常なるも現稀なる妖怪なれば是のみあらずして牙二郎が首級も亦悪相を顕はして歯を切ぎて睨詰る眼は宛猫に似て金銀のごとく光々全身斑なる毛は生ずる現山猫の亂るゝと疑ひるとも歎息堪ざりけりかくて角太郎は里人を俟程に筧の水を掬びて天王の血を洗ひ流して代衣に然の項に懸げ雛言の十々減に刺して像見の短刀を抜きて亦血を拭ひ鞘に納め現八と相譚て雛衣を亡骸を打て納戸へ容て折て永六を首とす大村赤岩なる村長に各々母屋なる里人の利鎌連枷なるを推乃たを殺わく

なるも取表に来りけるを里人に居まるく会庭面に土居に角太郎に亦を且氷六村長に現八を引ぎ雛衣が自殺の趣假一角親子の事

大約仇敵の顛末を辭短く説示ぶ永六村長主へさらに外面るゝ一里人あり。
雛衣が死を憐と又妖怪ま舌を振ふく駭怕れざるのるく只二犬士の孝義武
勇を感嘆ゝ置きと雲時罵り己ごろけりかく角太郎現八を逸東太が非
義船虫が猶悪且そのらひろる緯の趣二犬士の思ふ一ち村長まる報知をると
衆皆齊一うち笑ふく笹竜山も船虫もと憎むべるの共されどもこのる官府へ訴
られぶ假一角が弟子ろ一里人も引出されん然らば大村赤岩の村の雑誉の多
く被そ難義ま及ぶのもあんを笹竜山を許ゝく船虫をさ捕ゝ風波立ぶ
ひとめで一後日ま異論の起りもせば俺们證人ゝ一と緒共倡ま応ゝが角太
郎現八を逸東太ま云云と所望をんをもうと甘ふく木天蓼の短刀と渠が両
刀を返ゝはければ縁連然び再拝て二犬士ま別を告船虫を牽立ゝも外面へ
出る程ま逸東太が後者へ何の程ゆ還来うけん行轎子を舁居て柴門の

ゆとりまを土の出るをゝ〻そ躯く轎子をとゆ一が逸東太ハ云云と後者ゆ
ろをゝ〻く船虫をぶ轎子ゆ乗ゝくもちと両戸を揉げく戍を固ゝ
みぶゝこれま附をく網緒のくま走去りけり嗚呼逸東太縁連犬阪毛野が
父の雌言然るを現八角太郎ゆこの時世ま毛野ゆく同因果の犬士ゝを夢ゆ
ぶも知ろゝ一ゆければ船虫をもゝ乞ゆま任ゝく放ゝと白井へ還せゝ仇の為ま
刃を借ゝ盗児ま糧を齎もとゆ古語ま似ゝりそ後ま悔ゝく出ひゝとぶが原
事世ゆヨヲくるべゝ有然程ま角太郎ハ妖怪親子の亡骸を焼捨ぶと出ゝ
ぶ里人ゆを召近つけく如此々々と相譚ゆ及もゝく三箇の首級
両箇の軀を外面へ擡出ゝ樹の枝枯草を積累くそぶ尽ま焼立ゝば皆
灰燼とゝ〻く亡ゝ〻ゝて余後この処ま怪ゝぶのゝ一ぶこれをえるの病煩ゆく
殆死せんとゝるゝ至ゝ〻この故ゆ里人ゆ件の灰を埋ゝく貓塚とぞ名つけ

けるこれをくはゞ出ずもあらず十里四方の田も圃も鼠の憑たるやうけり毒藥変ず
藥とる鄙語は似たるべし間話休題かくて又角太郎は雛衣が亡骸を赤
岩の宿所へ遣さんとて氷六村長ホよ相譚よ船虫の乘捨てる轎子のあるを
氷六ホ相計て亡骸をこれを斂め里人ホ幾人か既ありて舁もて出せば角太郎は
父の髑髏を布よ裹みて抱ひて菴を発る里人ホ守らんつ現八を相伴て赤
岩の宿所へ赴く程よ犬村の里人もこれを送りて共侶よ陸續として徐行けり
吁瑞玉の霊なる犬士よあらぬまは奇特なるはれが雛衣が呑る玉は仇を作
良人よ返ぬ実ホ見返璧て地方の字空しかるを亦一奇哉とのたまの顔
大塚信乃が感得たる孝の字の灵玉は初よ西郎狗が呑てし玉の瘡
より顕れる又山林房八が妻沼蘭は仲兄と死父の細せし仁字自生の玉を
呑しホその玉腹よ在ること十五年その子大八の親兵衛が生るよ及びて件の

玉を握りて然るを人よく知るのみ親兵衛甫て四才ホるとき初てその掌を
ひらきしが玉ハ人間ホ顕れ出ず有如之者彼与西郎狗と沼蘭と雛衣が身の中なる
玉の顕れ出るとは違ひどもその趣各々異ぬ看官これをおりひ給へ

第六十七回

禮儀義家禄を捨つ
船虫謀て縲絏を脱る

却説犬村角太郎はその次の日より棺材を集て両箇の柩を造らもるホ
五六日ホして造出せしが迺士日を卜定て父一角武遠の白骨を香華
院へ送り葬るは赤岩の舊邦の犬村赤岩の里人近邨の百姓もまた柩を
送るの一千餘人ホ及びけりその次の日も吉日なれば又雛衣が柩を出せよ送
りくるのさのの如しかれが赤岩犬村両家の墳墓はおなじ寺ホあるとて
寺門も両日賑ひけり見よりと角太郎ハ父と妻との石塔を造立七七の

涌泉堂藏

忌日毎に経を讀み墓に参りて追薦の佛事怠ることなく喪中の勤務叮寧なれば人衆殊勝の孝と稱くらんと哀れを催しけり有然程に犬飼現八を赤岩の宿所に逗留して角太郎が徒然を慰るに犬塚信乃が孝友その父番作が志と乳母を東が貞操その伯母亀篠大塚墓蔭六が奸計信乃が結髪の妻濱路が薄命犬川荘助が人となり且荘助が主の仇簸上宮六を擊ちて及軍木五倍二が誣られて寃枉に獄舍に繫れ命も既に危うきを信乃小文五吾現八がこれを救ひ綽の趣犬田小文五吾が人となりその父文五兵衛が事山林房八が義烈その妻沼藺が貞順房八が母妙真犬江親兵衛が事犬山道節が復讐の綽の顛末その舊僕姥雪代平その妻音音その子力二郎尺八が戰歿その媳曳手が單身が薄命又現八が父糠助が養父犬飼見兵衛は八嬢の身を滸我の管領に仕へと犬塚信乃と組擊ちしその綽の一五一十面りに見しめさるに彼も日毎に物ぐるまぐるも日毎に物ぐるまぐるに慰めけるが角太郎は苦く毎に感激せざるとふとなく五犬士の墓に忌なが関るが現八と倶に諸國を遊歷して環會ふとなりけるが亦後角太郎は浴せんとまるが現八は耳にもう御邊の痣は面部にありて隱れなるものなれども某が痣は腐肉に在り最尾陋なる処なれば輙くは見せじ。浴まる折にはなるとなる現八はなるを強くその赤裸はなるを疑ふ痣の形ぬれば等しく彼も牡丹に似たりしかば大士なるを感悟して倍敬びて信の字の玉を取出して角太郎に示せば角太郎も亦感じて已ぶかく異姓の兄弟たるべき志を盡しけるが程なくこの年の陽月も過て比五十日の中陰の果はけるが角太郎は赤岩犬村の村長に并に赤縄新田なる氷

六を招ぎて赤岩犬村両家相傳の田園家庫を沽却さんことを相譚ふ。衆皆そのうるを忽ぎれば且疑ひ且禁めく。義引べくもあらざりしを角太郎を同因の友達を索ん為に現八と共侶に万里の逆旅に赴くよりと安房の里見家に仕へ死約束あるよを告ぐる衆人遂に推辞難くゆう為くを意に任せけるまれどもその田園家庫を買んとなのの早になければ姑く時を俟程に。この年の暮に至りて内主の人のもそ来ふければ價を廉しく賣渡さる六百五十餘金を獲ぐ則この金を四箇に分ちて二百金を香華院に布施して赤岩犬村の両家三世の父母の為并に亡妻雛衣の祠堂料に又五十餘金の返璧の草菴に此二の坊料を物ぐを定念仏堂に造り更て篤実なる老僧を住しめ又三百金を赤岩犬村なる民の貧なのに施行しく送る隈なく賑せりそ中に十金を雛衣が寓居の料とりく氷六に贈遣しければ衆人これを徳とりく怡悦の声両村に満けり。かくて又角太郎に残る二百金を亦両箇に分ちて百金を現八に路費とりくその腰に纏めて百金を自分の盤纏に充て准備ふ。ふ整ふ程に。あら正の年立りて春も如月の中浣ふりぬ山々の雪はもて消ねども里はるゞなく春色を催しく世を暖和ふりしかば日ふりも首途せんけれとて又赤岩犬村の村長里人氷六に招に取次て留別の酒食を薦めて扱衆人にいとけるに某ちなに相別れんに再會尤測ゆなて抑一角と呼るゆ赤岩の家世代の通稱なりかもが其も亦角太郎を改めて一角と名出るべ。され一角の稱はこの年来妖怪の為に目しく瀆されるをよりて家の通稱をも兼嗣んと快くて且某は犬村の養嗣ふ実家に兒孫なきをりて則両家を混合て某一人家督ふかれば一角の一文字は妖怪の為に取らぬ則一は萬物の霊ふ人の

名を改めて大角留別の小集す
村長
村左衛門
米六

男
天村見八
天村大角

人字を加へ大とす今より大村大角礼俄と名告るべしとの号を与へる
ゆゑに衆皆感佩まことに餘波を惜みけり既ふして現八もこの席上な
在り角太郎が名を取るこの冥利を感じ感じ角太郎を大
角と唱へけるこの時まで奴婢五六名假一角は仕へ隨ひ来る赤岩の宿
所ふ多り彼ふ初め假一角に使れるものとあるも主の妖怪なりしを知らねば大
角これを憐みて衣裳調度を紀念に與へ又この日皆身の暇をさらしつ
次の日大角は現八と共に香華院に甘本参りて諸霊へ起行の別を告げ香
奠を寺へ贈りて遲々として去るふ忍びぬ現八も亦異姓の兄弟たる義を
もって大角が父母雛衣ふを祭りけりやがてあるべきよりきれが大角は現八と
ともにその曛氏昏ふ赤岩ふ立ち入りて宿所を買主ふ遇ふて両人行装を
整へその詰旦首途をまれを送らんとふるのヨリけるを大角禁めて敢許

さぬ然りけれども氷六ふその他も里人たち躬れふ送りて四五里ふ及ぶの一百
餘人ふ及びなり有然程ふ大角は且庚申山へ赴かく亡父の遺迹を尋ねそ
現八を御道すふく件の深山ふ攀登れば俄ふ優なる神迹霊地ふ目を
驚ますばかりふ鳥路熊徑の幽なる奇峯怪松の巧なる筆に載せるも
辭ふ述べくもあらぬ彼石橋の危殆なる又石門の亭々たる実ふ是神作なる
及ばかりて一ツ二の岩橋を渡り盡して曩ふ現八が一角の寃魂ふ遭ふたる岩
崖の邊ふ至れば冷風面を撲山氣膚を犯して物凄くふて懐舊の涙を
沃ぐく恍忙として徘徊ふ即便行潦の兼ねて亡父の霊魂を祭るこの平晌
許既ふ祭了ぬるを見て又の去るふ忍びぬ躊躇く沙石の小だるを拾ひて傍なる
青壁ふ識さるべれば異界の世ふ親の渡りけん迹残みやまの雲の桟梯
現八屢これを吟じて且感じ且哀戚の眼包を倶ふ潤けり既ふして二大士ハ

奥院ハ赴ク三猿崖を遥拜セ更ハ又東窄より投降を下らんとする日ハ既ニ大ク周ルる割籠を送れてもそ来ざれば物欲うるく堪られぬ時ハ老たる両箇の樵夫路傍ニ憩てをり二犬士の来るを見て哺々と呼留め厳原割籠を忘れぬべ俺们ガ昏食のまうけの見進せんとのいひけく餅十枚許を取出て誘とく躱て贈ぬまければ二犬士ハ歓び受ていみてこれを腹まるまその味ひ尤妙々立地ニこれを盡して石蕩を掬びく飲んとく初て傍ニ在る両箇の樵夫ハるるりけり二犬士驚怪ミて事情を考るハ曩ニ山猫の亡びを歎ひ、舊庵へ帰るとて別を告てる彼山神と土地の神ガ假ハ樵夫と見れて餅を送て俺们ガ饑ハ充るものゆゑあらんと思ふ感心大ク為らぬを伏拜て歎びを述徳ニ答舊の胎内竇を出くその曛昏ハ剱緒ハ来はけこれより現八ハ大角ハ一を告て鴉平ガ茶店ニ憩ふまるべの翁ハ女房一人

ゐるを問ふ女房答ク鴉平ハ正月の比より病ムるニ老病の漸々ハ身ニ至ク本月の初旬竟ハ対まるゐるを赤岩ゐる一角ぬーの怪談あらんも忘えるを去歳の冬ニ健ゐをるほどの店ニ在るを庚申山の麓ゐる怪物の風声絶ーより道寸者を傭ふのゐく弓箭も賣れぬるハければ男子ガ店ニ在るも西安ゐるーを妾ハ只今詔ひーを鴉平ガ媳ハ在ると思ふ現八歎息ク老幼不定の世ハ幸ゐ齢ニ不足ゐる吏ゐるんぶ脆ク人の命ゐ去歳の秋ハ思ひくゐるべの翁ガ長物ゐるハ盃を行るゐヨヌゐるその歎びをいんとく立ちぬるハその人ハ黄泉ハ帰去りぬと答ケ迷惑しれ霊前ハ向ゐといひく懐搔捌りて取出ニ粒銀を紙ハ拈て取らるれば女人ゐまゐるを行ざれども亦推辞んハ捌ガ受戴ゐて収めける有此ーゐ現八ハ大角と共伯ゐそく茶店を立出ゐとの宵ハ剱緒の客店ハ宿ゐる投て往方を相譚ハ大角

雲時沈吟て京師のくに既ふるや御邉三とをふ及ぶまで久く逗留ま
めひこれば這回は且鎌倉へ赴くべしとて両人斯苛しく打扮て遊歴
其里の総角牛打童も武藝を嗜む今の世皆武者修行ゐんとて勝負を
望み怨を合こそ仇をるまめヨヌ原べかれば形貌を窶しそこゆる殃危の起ること
ゐ盤纏も半分を有くべしとなる現八頷そもそこの遠慮は某も御邉と亦同
意ぶきぶれ且この侭ふ鎌倉ふ赴ゆく便宜を討ゆ形貌を更ゆ両人潛ふ商量
まつ詰豆宿りを出ていそぎその日を累ゆ信濃路より上毛武藏の名所古
迹をうち巡り澳津波より相摸州へ山ゆも富て新樵る鎌倉ふ旅宿ふいで大
塚犬川ふの五大士ふ環會んとて日々に巷ふ遊べども聊似る人もあらざるを中に大角ハ
里の飼猫ゐどいはんとて土のそ徙れる猫をそも舊怨忽地胸ふ浮こそ亡親の為ふ物を
詳むと勝母ゐ車を返せが如し現終身の喪ゐとられ孝子の情こそ有ゐさけれ。

曲亭主人曰唐山ゆく山猫と唱るものハ即虎の別ゑ皇國の俗の所云
山猫ハ猫と或いゆ人家の猫逃く山林ふ入く這らざるを鳥鼠を食とく
みづから養ふ年を歴く形巨大ふ至れば人の家を張て小兒を捕啖ふとも是を
俗ふ山猫とゆ或いゆ山猫ハ一種の妖獸ゑの小大狗の如く猛ゑと虎ふ似
たりと必のまゞ孰ゐ信るを知ゑ堂貫海東風土記及八丈筆記を閲せゑふ
山猫ハ八丈ゐる岐山ふわゆこの他邉境の深山ゆい稀ふこれゆとゆむゐ慶長
寛永年の間いづれの州ゆ有けん山猫を獵出せゑゆゆ有けゑこの風声都下の
人口ふ膾炙せゑば世ふ山猫傑師とゆゆの出来ふけゑこを傀儡師ふ似るゆの
ゆくヨヌくいと者の所為ゐるゐ今の絶ゑゐ又繪草子ゆも當時山猫物語
猫又つくゑゐどゆふ小児の翫好物ヨヌく出ゑゐ中こそ近
曾ニア写山樓ゆ明画の猫をんとゐその猫の相貌人家の猫と同ゑゐ

尤完悪ふべく仰て飛鳥を窺ふの如しその紙中に青壁苔岩戎画る
のみとくこの猫に名字を定むるのあとうヲこれを紀てあや山猫ゑんとのひ是
かれば唐山にも一種の山猫てあれあるべいまぐこ具つに筆に載るものをうける
のミ又按ずるに虎と猫とその形状相似くその氣を同くも虎の人を蹤き撲
殺せーと疾速ふこれを咬ぶ死人の上を跳踰く疾視とそのその死人あづから立て
帯を解き衣を脱て又倒るるに於て虎その赤裸まるーとそ初てこれを咬まこの
猫も亦死人のうへを跳踰れいその死人立て徘徊をーとび水を飲むとその力よく百人に敵
この時棕梠箒をもて打とそのその人又倒るとうの是に由て彼を思へば虎と猫と常
その形状の相似くるのみならず亦ようその氣を同くするのみ人家の老猫化してその家の
老母とるの或食事を人まるをぶ或の竊に行燈の油を舐るるどの物語ハとす
ゆるの山猫の怪談い聊も類を遺れるのミ唐山にも所云金華の猫王つれく草まのる連歌師
伝阿弥が記れるもまるの亦是山猫のごとるべし。

それハさて置き生再説笹竜山逸東太縁連の辛く二天士の怨を免れく捕捕る
船虫を行轎子まちち乗ーく主従綾に三四名白井の城を投くのぞく程ふ
見くて信濃州沓掛の驛に宿を求ー霄不慮の難義のぞ来ふけりその
所以を原るに逸東太ハ赤岩ゆく頼切る後者の尾江内墓内を現ハふ殺
きーより既ふ従僕二名を殺ふ是ようの大約宿ふ就毎ふ船虫を後者ーく
通霄成らせんと欲るるその人足ら船虫をうぶ臥房る拄に痛く繋措と
つぶ多ハ臥ーこれを戒るのみ程に此地方ハ山腹る驛路の深もく秋の季ふれば
峯上ふ牝恋ふ牡鹿の声檐下に暢ふ秋の風もみる腸を断媒を悲猿一聲
山峡月とのけん逆旅の情に堪ぬ夜るも心る死後者ハ皆次の間に枕戎
並べく鼾睡の声と齟齬の音のミ耳ふ就まぞに逸東太ハ寝ら是ぞ
幾遍とるく臥轉とるく心苦ーく岸折枕退ふ繋れる船虫ハ哀ーげに逸東

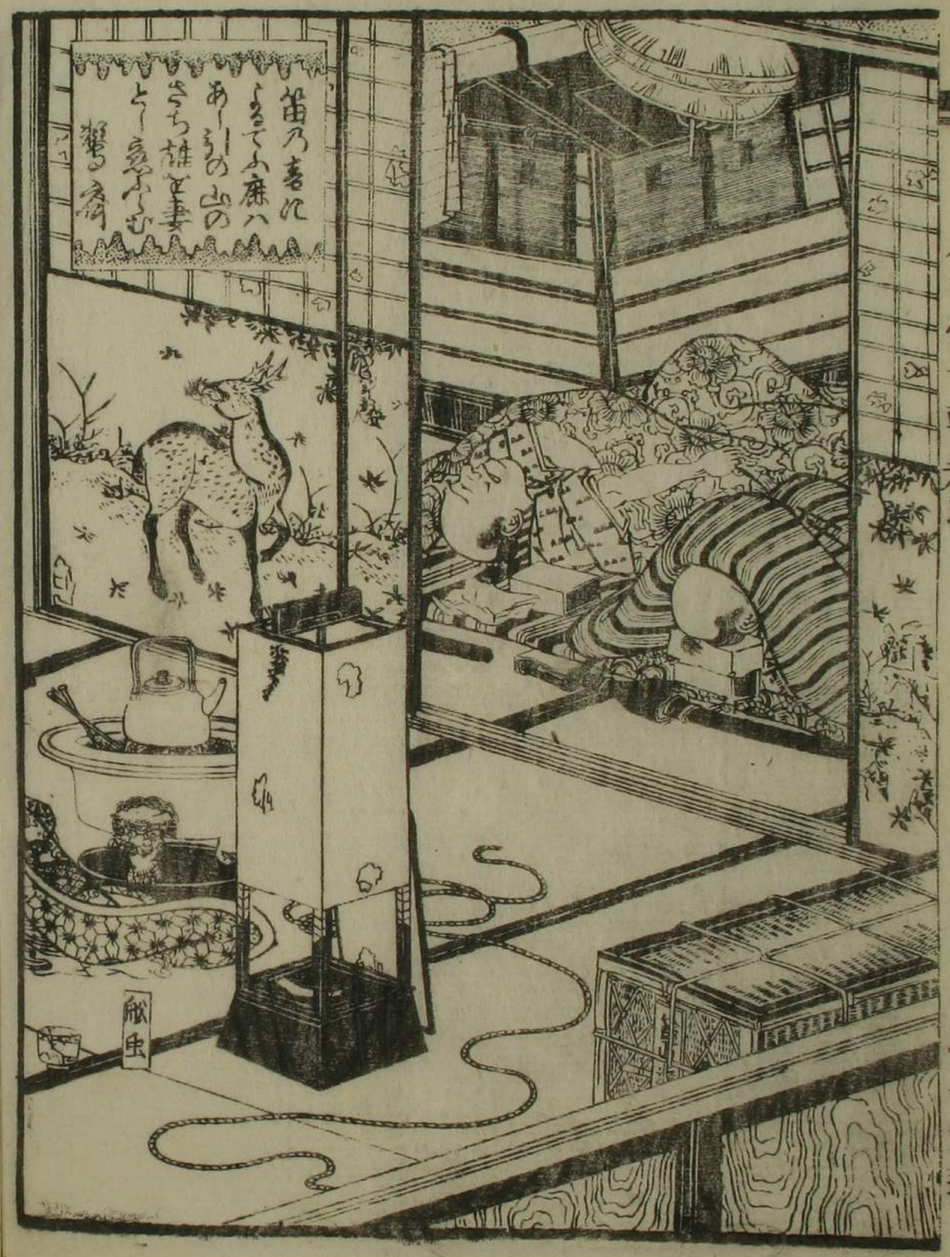
太を呼覚して喃筍竜山や〜木天蓼の短刀の失るゝもその鞘を摧き茶に
用ひ〜つも假一角ゞ所為ふまく初い妾が心もく夫よ蔑め〜ゐゐゐゐゐゐ
身の罪を脱れん料ふ妾を痛く綁めくるゝく白井へ牽んとい現情ゐゐ心ぞや
斯鬼々〜紀ゐん身ゐれども憎〜とのこい思ひ侍らぬ浮世ふ幸ゐゐ妾が罪障彼
一角を妖怪変化と知らぐ妻ゆたなく〜必ず恥〜ゐぐら一宵も真よ枕を替せ
〜ゐい両歳以来絶くゐ〜老ゐる人の癖ゐれが調戯物はせらるゝと思ひ辛防
きゐゐゐゐゐ紀然るを夫よ異ゐらゝく妾も首を刀られるばいぞゐん身を恨〜と思ひ出ふを
ゐさぞや已ん過世甚麽ゐる業報ゆゝゐん身と妾ハ今一世ゆ雙言敵ゐ妾紀れ
ども熟視れば〜ん身の面影ゐらゐ武蔵よ在り〜時幼稚馴染ゝ睦ゐ〜良
人よ似さゆゐ紀舊の良人ハ故ゆゝく世を去ゐ〜紀ゐ〜ゐゐゐゐ処々ふ流
浪〜く好よ就ゐ紀ゐ紀思ひ出さゐ日ハゐ紀ゐれゐゐ隨ゐく似ゐひ〜ん身ふ

情願ゆゝを〜ゐ引せゐんゐゐゐ訝ふ逸東太ハ枕を擡身を起〜く
ゐの老狐が何ゐゐゐ〜ゐゐ面影の汝の舊夫よ似ゐゐゐゐゐゐ知ゐゐゐゐ
ゆゝゐゐゐゐ船虫ゐ泣く如右宜ゐ情ゐゐ竹木ふ笑ゐ紀君ゆゝゐゐん妾が
願ひい餘の詭ゐゐゐゐゐゐゐゐの道中の日子の程密々ふゐん身ゐ〜ゐ妾ふ良人と呼
〜ゐゐ世ふゐ紀夫ふゐゐ心地〜ゐ〜ゐ刀の鏑ゐゐゐゐ良人の為よ捨ゐ命と思ゐ
然ゐゐ〜ゐ兄ゐん身ゐゐ〜ゐ解く一宵ゐゐゐ真の夫ふゐゐく慰めゐゐゐゐゐ
ゐゐく首級の座よ直ゐく成佛〜ゐゐゐゐゐ口説ゐく泣
沈ゐゐ逸東太ハ心動ゐく肚裏よ思ふゐゐこの船虫ハ歳ゐゐ四十よ近紀欲
落の花さゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ然ゐく捨ゐ女人よゐゐゐゐれ長尾家に
仕へゐゐゐ妻ハ三人ゐゐ娶り〜ゐゐゐゐ或ハ一年或ハ半年添ふゐ添ゐゐゐ
ゐく只一下ゐゐの子尚ゐ〜ゐれゐ去歳ゐゐ妻ふ〜く何ゐの僧正ゐ優て

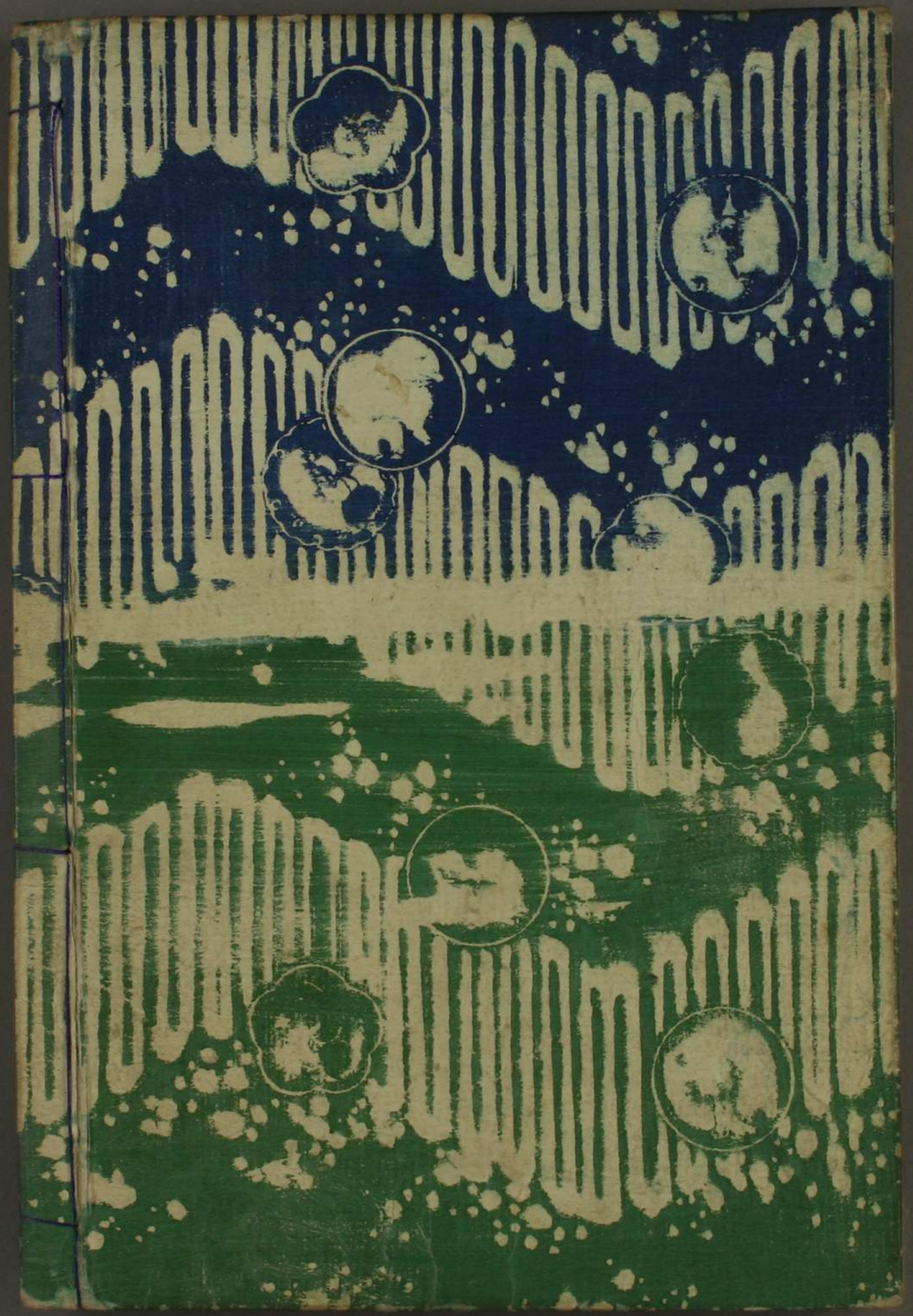
精進潔斎の枕寂しき折なるに是奴と一ト宵調戯まくば飯盛は瘡毒
あらん海士が塩焼く辛き世に勘定尽もあられを道中なかなか妾にあく
遂に白井へ牽ゆくめりてこの身の罪を贖へバ孰れにても損ハ無しと計較既に
定りけれバ頻りに頷き含笑て船虫汝が願ひの趣うけ引くべきならねども心
操の不便さよ霎時郷の索を放して今宵一ト夜さ女夫とならん勿論ぞ従
者にならべ深くも匿むなり明れバ天の明ぬ間に又郷さ白井へ牽て云云と主君へ
訴えあげて後命ハ運に任すべし先よくこの義をおもひなぐ後に異論をのひ被
告ハこれ又ずく相計んやおもろなる欲いふぞやと向へバ船虫涙を飲めて歎しく
待ちかれ一ト宵情に預らバ又郷めく何囹迄牽るとても恨なし只くく郷を解て
よとひよみ欲ぶ逸東太ハ遽しく立ちかく郷の索繹捨て縊れしところを拊て
やはそのまゝを扶て携て臥房の内へ伴へバ船虫ハ笑しげに秋波つかふ虚慝

かくれ懸れバ逸東太ハ魂飛びて戦きてどうする由も騒がぬ面色して悉く四下を見ん
如かく船虫物ハ欲しからぬや昼餉の割笹竜の餘れるあり又吸筒に酒もあらん
喫一喫く寝まりねとなべて割笹竜も吸筒も臂長に引よせて假の妹伕の三三
九度媒妁不用の盃ハ仇と情の細々言煮染の肴を抓食ひ冷酒ゆきや
傾盡せし半酔機嫌は春ハ来てまや引容るゝ夜衾表裏甚麼なる夢を見
結びけん楚の襄王ならねども雨の笠前頭に雲の盾閧戦数刻更闌て疲
労果たる逸東太ハ前後も知らず臥たりける却説その夜ハ明まされて烏の聲に
驚覚る逸東太ハ左右を見るに枕をならべし船虫ハ何処ゆきけんあるところぞ
什麼いかにと騒鬧ぎて廁浴室の四隅まで索求るに影だもみえざ原
来彼奴が奸計なりしこれなる一碗態僻しト口物に頼を焼れて捕逃せし
あを朽をしけれ者共起よと呼立れバ次の間に臥たりける従者まで起て来つ

逸東太


笛乃音に
よるてふ鹿ハ
あしらの山の
さらち雄と妻
とゝ鳴くなり
鶯斎
紙屋

船虫は夜の中に索を脱く逃亡うと皆く驚くのを逸東太が謀られるすを誰とく知るれるけれバその郷を脱るの妖猫は優せ博煉之とく古を掉く罵騒げが逸東太は竊に羞く失る物のありやまるとく衣を振ひ駄荷を披く物悉く検見るに彼木天蓼の短刀と主君より賜りたる三十金の盤纏る原来件の三種も船虫奴に奪去られ遠くに追蒐よとく主従四方に部しくその日は終日索ねるども絶て往へ方を知るよしもなれが舊の客店まで来つるの夜もまた逗留しく主従額を病しけり登時逸東太は肚裏に思ふ縦船虫は逃亡うとも彼短刀さへ奪れされが白井へ還るこしいふまでと頭を傾けるを又況く尋思をもるに鎌倉の管領扇谷定正は近曽上毛白井の城をうが主君長尾景春殿に責落されて今は武蔵に五十子の城に在り定正数度の敗軍より長尾家を怨ると既に骨髄に徹せり五十子に就く定正は降参白井攻の案内に就く計策を具に述く年来長尾に仕へる趣を以て仕官を願ひ定正必欣くこれを重用せんぞうされ扇谷家に故主の千葉自胤と合體不介に自亂は近曽尚我の成氏朝臣に志を運ぶと扇谷家と睦しくらべと豫く怪るもあれが定正は影護とて是に外に身を寓せく高禄を以んとのぶもと計較せう定りれが後者おまりに生て躯五十子の城に執主にける長尾景春を恨るよりもて降参をとひ入れけふ定正初は疑を問答数回に及ぶとも逸東太は言巧を巧みくよくその機を揣アーぶ定正遂に逸東太を留めそれを用るに太くるに扇谷の老臣等も及定正の内室鮮蛍目前に逸東太を嫉く屢定正を諫めども定正一毫も

聽もて式部の[illegible]幾程もなく逸東太を先臣の次もとと家の政事を任せ給ふ逸東太の勢ひ[illegible]人の耳目を驚き權家あどなりける不題大塚信乃戍孝[illegible]曩ゑ荒牙山の尼難を道節荘助現八小文吾ホの四犬士を別れ[illegible]呂管環會[illegible]を信濃路より越後ゑ赴[illegible]陸奥出羽を杖を曳くホ路費竭れ[illegible]その地方ホ逗留[illegible]文学武藝を人ホ誨て東俗を受け盤纏又整へ[illegible]その地方を立去て他所を遊歴せ[illegible]程を既ホ三とせの光陰を送りて四年とホ陽月の下浣大角が現八と首途[illegible]甲斐州ホ旅宿[illegible]一旦磨を郡を富野宛山の山脚を過るを小春の天の癖[illegible]れどもとすれど昔[illegible]ホ山腹の冬枯野邉尾花搔[illegible]程を忽地背後ホ鐃鄉音高く揺と放せ[illegible]鳥銃を信乃ハ左の腋を穀[illegible]て[illegible]俄撲地と倒れる畢竟信乃銃丸ホ穀倒れ生死存亡甚麽[illegible]次の巻ホ解分ると聽ゆ

里見八犬傳第七輯巻之三 終